

平成 21 年 5 月 29 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2008

課題番号：19520252

研究課題名（和文） 19世紀イギリスの帝国主義をめぐる言説における文学とジャーナリズム、政治の関係

研究課題名（英文） The Relationship between Literature, Journalism and Politics as Perceived in the Discourses on Imperialism in 19th Century Britain

研究代表者

天野 みゆき (AMANO MIYUKI)

県立広島大学・人間文化学部・教授

研究者番号：50258282

研究成果の概要： 19世紀イギリスの代表的な小説家、ジョージ・エリオット（1819-80）とジャーナリストでもあり作家でもあったハリエット・マーティノウ（1802-76）の「帝国意識」を探ることで、当時の文学とジャーナリズム、政治の関係を明らかにした。

二人ともイギリス人の卓越性を信じ、それがイギリスの帝国支配を正当化する根拠となっている。しかし、民族支配の問題は階級およびジェンダーの問題と本質的に同じであることを洞察し、他者に対する寛容性を最も重視することで、独善的な帝国主義イデオロギーに染まるのを回避していたことが明らかになった。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	500,000	150,000	650,000
2008年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,100,000	330,000	1,430,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ語系文学

キーワード：帝国主義、帝国意識、ハリエット・マーティノウ、ジョージ・エリオット

1. 研究開始当初の背景

(1) 近年は帝国史研究において、「帝国」が本国にいかなる影響を与えたかを文化史、社会史、科学史等の観点から検討する重要性が認識されている。

(2) ジョージ・エリオット研究において、彼女の最後の二作品を分析するには、そこに表れた「帝国意識」を明らかにすることが重要であることがわかった。そして、彼女が19世紀イギリスのネットワーク（帝国主義、エ

スニシティ、ジェンダー）の中でどのような位置を占めるのかを考察するため、ハリエット・マーティノウの帝国に関する著作の研究を始めた。ジャーナリスト、フェミニスト、旅行作家、小説家でもあったマーティノウは、19世紀の帝国をめぐる言説の意味を考察する上で欠かせない作家である。彼女が1857年、インド大反乱直後に出版した『インドにおけるイギリスの支配：歴史的点描』（以下『イギリスの支配』と略記）にみられる帝国意識を分析した。これによって、マーティ

ノウとエリオットの帝国意識、および執筆方法における共通性を見出すことができ、この両作家を中心に、19世紀イギリスにおける帝国意識を研究する意義が明らかになった。

2. 研究の目的

(1) 19世紀イギリスを代表するジャーナリストの一人、マーティノウと同時代の代表的な作家、エリオットを中心として、当時の「帝国意識」を分析し、19世紀イギリスの帝国をめぐる言説における文学、ジャーナリズムおよび政治の関係を明らかにする。

(2) この二人の作家が抱く「帝国意識」と、実際に帝国の植民地に住んだ女性たち、および帝国を旅した女性たちの「帝国意識」との類似点、相違点を明らかにする。

(3) 帝国の問題とエスニシティ、ジェンダーの問題との関連性を考察する

3. 研究の方法

(1) エリオットとマーティノウの帝国意識を比較し、文学とジャーナリズム、政治の関係を考察する。

(2) デボラ・ローガン編『ハリエット・マーティノウのイギリス帝国に関する著作』(5巻)に所収されている著作、および『自伝』から、マーティノウの「帝国意識」とそこに隠された葛藤を探る。その際、階級意識やジェンダー観との関連性も考慮に入れる。

(3) 英国図書館において、マーティノウが長期にわたって『デイリー・ニュース』に執筆した論説を収集し、分析する。

(4) イギリス帝国植民地女性書簡集、およびイギリス女性の初期旅行記に「帝国意識」がどのように現れているかを検討する。

4. 研究成果

(1) 主たる成果

ジョージ・エリオットの「帝国意識」を、マーティノウからジョン・スチュアート・ミル、エリオットという系譜において明らかにした。

「帝国意識」とは「他民族に対する帝国主義支配を支え正当化する意識=心情」であり、「自国に従属している民族への人種的差別

感に基づく侮蔑感と自民族についての優越感によって支えられていた。」(木畑洋一「イギリス帝国主義と帝国意識」北川勝彦、平田雅博編『帝国意識の解剖学』(世界思想社、1999)25頁)

マーティノウの『インドにおけるイギリスの支配』(1857)と『未来のインド政府への提言』(1858)、ミルの『女性の隷従』(1869)、『代議制統治論』(1861)は、彼らが民族、階級、男女間の支配構造を洞察しながらもイギリス帝国の支配を肯定した論理を示しており、白人の卓越性に対する自信がいかにか強かったかを語る。従属国とその国民を進化させるといふ、西洋の進歩主義に基づく道徳的な大義名分に支えられ、二人の作家の帝国意識はいっそう強固なものになっている。彼らの主張する優越性の追求は道徳的優越性の追求も意味しているため、簡単に否定することは難しい。

イギリスにおいては1850年代から60年代にかけて中流階級の人々が白人の優位性を強く主張するようになり、以後のイギリスの領土拡大への布石となった。また、1865年のジャマイカ事件を契機に、黒人は全て同等に劣っているとみなす傾向が生まれ、その偏見が全世界に多大な影響を及ぼした。こうした時代を経験した後、エリオットは1870年代後半に帝国主義を批判する作品を著したのである。

『ダニエル・デロンダ』(1876)において、エリオットは小説の登場人物をジャマイカ事件とインド統治に関わった歴史上の重要人物と比較することで、個人の関係に国家(民族)間の関係を重ね合わせ、帝国主義に対する批判を行っている。また、『テオフラストス・サッチの印象』(1879)の語り手、テオフラストスに関して注目すべきは、第一に、帝国意識および他民族に対する偏見を批判していること、第二に、偏見がいかにか形成され、支配の構造が強化されるかを示していること、第三に、異なる民族の共生を提唱していることである。

三人の作家はいずれもイギリス人の卓越性を信じ、支配関係のありようを洞察しているが、従属国民に対する見解や帝国主義に対する態度には違いが見られる。また、作家の関心が帝国の支配を正当化することから、従属国の存在、あるいは移民の増加や民族の融合が支配国イギリスに与える脅威へと移行している点に、帝国が抱える問題の深刻化をうかがうことができる。エリオットは帝国の過酷な現実を理解し、支配国の精神的退廃を危惧するゆえに、歴史を冷静に分析し、同時代の作家の洞察からも学びつつ、いかに生きるべきかを示したのである。エリオット自身、帝国主義イデオロギーから完全に逃れることはできなかったが、彼女が示した民族共生

の道は、厳しい自己批判と他者に対する寛容の精神によって、偏狭で浅薄なナショナリズムに陥る危険性を回避しようとするものであったと言えるだろう。

(詳細は拙論「ジョージ・エリオットと帝国意識 『ダニエル・デロンダ』と『テオフラストス・サッチの印象』の文化的意義」を参照されたい。)

マーティノウの生き方とその著作がまさに 19 世紀イギリスのジャーナリズム、政治と文学の関係を体現していることが明らかになった。

エリオットが政治的な活動や発言をできるだけ避けようとしたのに対して、マーティノウは政治家とも直接関わり、インド、アイルランド、中国におけるイギリスの支配について積極的に発言した。

最初の作『経済学例解』(1832-34) は、アダム・スミスやベンサム、マルサス、ジェイムズ・ミルらによる経済学の理論を一般大衆にわかりやすく教示することが目的だった。経済学は、社会のすべての階級の人々を経済的独裁とそれに伴う社会的不平等から解放することを約束するものだとしてマーティノウは信じていたからである。扱われたテーマは、ラダイト運動や救貧法、救貧院、労働者階級のアルコール中毒といった国内問題から、帝国主義、植民地化政策、民族問題、奴隷制度などの国際問題まで広範囲にわたる。また、物語の舞台もヨーロッパだけでなく、東インド、西インド諸島、シベリアやアフリカにまでおよび、世界的視野から様々な問題が論じられている。

『経済学例解』は 25 の物語から成るシリーズで、その第 1 号が「未開地の生活」(1832) である。この物語は、南アフリカで原住民のブッシュマンの襲撃によって家を焼かれ、家畜も奪われてしまったイギリス人入植者たちが生き残りをかけて食料を確保し、住処を築いてゆくさまを、そして彼らがいかに絆を深めてゆくかを描いている。この作品はアダム・スミスの『富国論』の第 1 編で論じられている分業の重要性を強調し、経済学の有用性と応用性を大衆に理解させるといってマーティノウの目的に沿うものに仕上がっている。

だが、提示される理論があまりに明快であるために、「すでに受容されたテキストを繰り返している」、「物語を理論に付随的なものとしている」といった批判を招いている。しかしながら、先学と共有する理論に付随させたかに見える物語が、イギリス帝国主義をめぐる言説としてマーティノウの鋭い洞察を示しているのである。

まず、物語の舞台を南アフリカに設定する

ことで、当時ほとんど一般に知られていなかった土地に人々の注目を集め、そこに入植した人々の生活を通してイギリスの帝国主義が引き起こした問題を提示した意義は大きい。

1860 年代末に南アフリカの巨大な鉱物資源の存在が知られるまで、南アフリカはイギリス経済にとって重要な存在ではないとされ、イギリスからの移民の数も他国への移民に比べると少なかった。この地にあてられたイギリスの海外投資はわずかで、イギリス政府は植民地に最小限の行政機構を提供しただけで、出費を抑える方針をとった。だが、1820 年にイギリス政府はケープ植民地を政治的に利用する決定を下したのである。イギリスの失業と社会不安に対応するため、イギリス諸島から同地域に入植民を運ぶとともに、彼らが 100 エーカーの用地で農民として自立できるよう 5 万ポンドの予算をあてることを国会で決議した。それによって 8 万人の応募者の中から選ばれた 4000 人もの男女と子どもが、自費で移住する 1000 人とともに入植した。彼らとその後の移民によって、植民地社会はいっそう複雑になっていったのである。

このように南アフリカはイギリス人の移住先として政治的に利用されながら、イギリス政府から軽んじられ、本国のイギリス人に南アフリカの情報が与えられることもほとんどなかった。マーティノウ自身、1852 年から 1866 年まで月に平均 5 - 10 本の論説を書いた『デイリー・ニュース』では南アフリカを取り上げていない。また、19 世紀イギリスの主要雑誌の一つである『ウェストミンスター・レビュー』は、1869 年によやくアフリカに関する論考を掲載しているが、その論考もイギリス人はアフリカについてほとんど知らないと述べている。1832 年の時点で南アフリカに関心を向けた「未開地の生活」は、

イギリスの帝国主義政策の非人道的な側面を批判するとともに、分業という観点から帝国の経済の現状を明らかにしてイギリス人の無知を批判している。

(詳細は拙論「ハリエット・マーティノウと南アフリカ 「未開地の生活」論考」を参照されたい。)

『東方の生活、過去と現在』(以下、『東方の生活』と略記、1848) は、マーティノウが 1846 年 10 月から半年余りかけて訪れたエジプトと聖地パレスチナについての旅行記であり、出版と同時に大きな反響を呼んだ。訪れた土地の風景と人々の様子を活写するにとどまらず、社会学的な分析や歴史的考察を加え、さらに宗教の根本的な問題にまで踏み込んだからである。当時のイギリスは 19 世

紀初頭から輪郭を現わし始めた、いわゆる第二次帝国がインドとの関係を中心に「東」を射程に入れ、更なる勢力拡大を図っていた。人々のまなざしは強く「外部」へと向かい、自然風景への憧れや異世界への関心が旅の大衆化と旅行記の人気につながった。大英博物館のコレクションや見世物の館、エジプシャン・ホールでの展示によって、エジプトへの関心が広く社会に浸透しつつあった時期でもある。また、科学上の発見や歴史主義的聖書批評が聖書の権威を揺るがし、宗教論争が盛んに行われていた。このような状況の中で、もとはユニテリアン派であったマーティノウが古代エジプトの宗教をユダヤ教とキリスト教、そしてイスラム教の源流として分析、提示したのであるから、『東方の生活』が賛否両論を引き起こしたことは想像に難くない。

当時の複数の有力雑誌に掲載された『東方の生活』の書評はいずれもマーティノウの描写力を高く評価しながらも、旅行記というジャンルを逸脱したことを批判している。ピクチャレスクの伝統にそった旅行記という、女性に許された範疇を越えて歴史や神学という「男性の領域」に侵入したことをあからさまに非難するのである。

マーティノウはイギリスにおいては広く大衆の支持を得て、国会議員が意見を求めるほどのジャーナリスト、作家として政治的影響力も持ちながら、女性であるゆえの制限を加えられ、国外に出ればイギリス帝国の支配国の一員という強者であると同時に、やはり女性であるがゆえに侮蔑のまなざしや嫌がらせを受けた。特権的な存在であると同時に抑圧される「他者」であること、このようなありようは『東方の生活』において、彼女の対象との距離のとりかたを不安定なものとしている。人々との距離を取り除こうとする気持ちと距離をおく態度とが絶えず共存し、そのバランスが状況によって変化するのである。そして、彼女の帝国意識も心的距離を不安定にする重要な要素であり、個人としてのアイデンティティーの形成とも深く関わっている。

エジプト体験はマーティノウの先入観をことごとく打ち壊し、彼女の帝国意識を動揺させただけでなく、美的感性の変革ももたらした。また、彼女はハーレムを訪問することにより、女性に関わる問題と奴隷制度についての洞察を深めた。

さらに、旅を続けるほどに彼女の心を占めていったのは宗教の問題であった。マーティノウは、批判するよりも理解と共感を深めようとする姿勢でエジプトの古代宗教、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教を比較し、進化論的視点から宗教の系譜を捉えなおしたのである。宗教の問題に関しては、エジプトの

古代宗教を宗教の源流として高く評価したことと、歴史主義的聖書批評の立場をとることで聖書の権威を否定したことが特に厳しい批判を招くことになった。後の『自伝』（1877）で示しているように、彼女は『東方の生活』の執筆時にすでに、文明世界の神学はいずれも根拠のないものという確信を得て、神学を離れつつあったのだ。しかし、『東方の生活』において際立つのは、異なる宗教や他者に対する寛容性であり、それは人間の能力への絶対的な信頼と前向きな思考に支えられている。

（詳細は拙論「源流への旅 『東方の生活、過去と現在』」を参照されたい。）

『自伝』は、マーティノウが1843年から書き始め、死を覚悟した1855年に完成させたもので、彼女の死後1877年に出版された。自分について語ると同時に、交流や関りのあった友人や文学者、政治家を評価し、時にプライベートの侵害と思えるほどの内情の暴露や批判も行っている。マーティノウ自身が読者にとらせようとした見方を示した著作であるということをおぼろげに忘れないが、出版界、文学界、政界の内幕を垣間見させる点で非常に興味深い。また、マーティノウにとって政治と宗教がいかに重要な問題であったかを物語る著作であり、他の著作と合わせて読むと、彼女についての理解を深めることができる。

さらに、一見対照的なエリオットと共通する経験や葛藤、考え方を持っていることが明らかになった。

『デイリー・ニューズ』に掲載されたマーティノウの論説には、彼女の楽観的な帝国意識とその変化をたどることができる。

マーティノウとエリオットの著作をライザ・フェイの『インドからの手紙』（1821）と比較して、いかにマーティノウとエリオットが先見の明と他文化に対する寛容性を有していたかがわかった。

(2) 成果の国内外における位置づけ

19世紀には大きな影響力をもちながら、死後は歴史や文学史において重要な位置を与えられず、「歴史から消されたジャーナリスト」と言われるマーティノウに光をあてるとともに、エリオットの新たな側面を明らかにすることで、これまでのマーティノウおよびエリオット研究を発展させることができた。

なぜなら、マーティノウについては、1980年代から再評価が徐々に進められているとはいえ、彼女の著書や論考はまだ入手が困難な状態にあり、2004年によくデボラ・

ローガン編『ハリエット・マーティノウのイギリス帝国に関する著作』が出版されて、彼女の帝国主義を本格的に研究できる段階になったところだからである。日本国内においてはマーティノウについての本格的な研究書は皆無といってよい状態である。

出願状況(計 件)

(3) 今後の展望

マーティノウの『アメリカの社会』と『デイリー・ニューズ』の論説に見られる帝国意識の変化をたどり、マーティノウ研究を体系的なものとして発展させたい。

取得状況(計 件)

実際に植民地に住んだ女性たち、および帝国を旅した女性たちの帝国意識についての研究を深めることで、19世紀の女性たちのネットワークと、その中でマーティノウとエリオットが文化形成に果たした役割をより明確にしていく予定である。

[その他]

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 2件)

天野みゆき「ハリエット・マーティノウと南アフリカ 「未開地の生活」論考」『県立広島大学人間文化学部紀要』第3号、91-101頁、2008年、査読無し
天野みゆき「ジョージ・エリオットと帝国意識」『ダニエル・デロンダ』と『テオフラストス・サッチの印象』の文化的意義』『ジョージ・エリオット研究』第9号、1-16頁、2007年、査読有り

6. 研究組織

(1) 研究代表者

天野 みゆき (AMANO MIYUKI)
県立広島大学・人間文化学部・教授
研究者番号： 50258282

[学会発表](計 件)

(2) 研究分担者

[図書](計 1件)

天野みゆき「源流への旅 『東方の生活、過去と現在』」 要田圭治、大嶋浩、田中孝信編『英文学の地平 テクスト・人間・文化』所収、音羽書房鶴見書店、2009年8月刊行予定、査読有り

(3) 連携研究者

[産業財産権]